

体験版

M女教師の告白

鮎川 かほる

美樹さんの手が振り下ろされ、スカートの上から強く叩かれました。何度も叩かれ、お尻が熱くなってきました。わたしは異常なほどに興奮してしまいました。教師が校舎の中で教え子の少女からお尻を叩かれているのです。その異常性も相まってわたしを高ぶらせるのです。

「お願い、もう許して」

軀を縛りつけられているわけでもなく、相談室から立ち去ればいいだけなのに、わたしはお尻を叩かれたまま、美樹さんにへりくだっていました。マゾの顔が仮面を破り去り、顔を出してしまっていたのです。

「先生、かわいいわ。もうこれで先生はわたしのものよ」
キスをされると子宮がじーんと疼いてしまいました。

その日からわたしは美樹さんのものになりました。毎日、お尻を叩いていただきました。美樹さんの唾をのみ、足を舐めることもしました。裸体を晒し、自慰をする姿まで見られました。すごく恥ずかしいのにわたしは乱れに乱れ、マゾの悦びに打ち震えてしまいました。もちろん、あそこは恥ずかしいほどに濡らしていました。美樹さんに濡れぐあいを点検されることはすごく恥ずかしいことです。恥ずかしいことといえば、美樹さんの前で排泄することは、マゾのわたしでも慣れることのできない羞恥に襲われます。

「先生はわたしの牝犬だから、ここでおしっこすることぐらい簡単にできるわよね」

昼休みに校舎の屋上に来るように呼び出され、おしっこをするように言われたのです。それが初めて排泄を見られた日でした。

「ここでおしっこを・・・」

わたしはその場で立ちつくしてしまいました。

「早くするのよ！」

強い口調で命令されるとわたしは、マゾのスイッチが入ってしまいます。スカートをたくし上げ、しゃがみ込みました。パンティの着用は禁止されているので、股間がむき出しです。

「恥ずかしいことが大好きな牝犬なんだからおしっこぐらいすぐできるでしょ」

美樹さんに追い打ちをかけられ、わたしはとうとうおしっこをしてしまいました。水流が放物線を描いてほとぼしり、股間の前にどんどんと水たまりができました。

「はしたないわね。もっとお淑やかにできないの。クラスのみんなが見たらどう思うかしら」

美樹さんの言葉責めにわたしは酔い、

「そんなこと言わないで・・・先生、とっても恥ずかしいのよ」

と潤んだ目を美樹さんに向けながら、すべての小水を出し切りました。

「おしっこができたご褒美よ」

美樹さんの顔が真上に来ています。わたしはしゃがんだまま口を大きく開けました。美樹さんの口から唾液が垂れてきます。それをすべて口で受け止めました。マゾのわたしにとって美樹さんの唾液はご褒美です。マゾのわたしはご主人様の命令に従い、できたご褒美をいただけることで心が満たされるのです。

「先生、美樹の奴隷になっているんだね」

「先生ってドマゾなんですよ。」

その日、わたしのマンションにやってきたのは美樹さん一人ではありませんでした。美樹さんからの甘美なそして背徳的なレズ調教を期待していたわたしは、冷や水を浴びせかけられた思いです。

「美樹さん、これはどういうことなの」

わたしは美樹さんに視線を向けました。犬の首輪をしています。わたしを見て、成美さんと真理さんがくすくす笑っています。美樹さんをお迎えするときにはいつも首輪を自分で填めるように言いつけられています。マゾのわたしは、ご主人様の命令に従うときゾクゾクとする快感に全身が浸されます。でもこのときは、快感が一気に冷めてしまいました。それどころか緊張感が全身を走ります。

「先生を学校で調教しているところを見られちゃったのよ。二人につめよられて仕方なく全部話してしまったの。ごめんね、先生」

美樹さんは平然とした表情で微笑んでいます。全部ってどこまで話してしまったのでしょうか。緊張感とともに大きな不安感が襲ってきます、

「そ、そんな」

わたしは絶句してしまいました。

「先生、お尻叩きが好きなんですよ」

「おしっこやウンチまで美樹の前でしているって聞いたわ

よ」

成美さんと真理さんの言葉が胸に突き刺さってきます。この場から消えてしまいたくなります。羞恥の嵐が襲ってきます。

「成美も真理も先生を調教したいって言うから、これから3人の共有奴隷ということにするわね」

美樹さんはあっけらかんとした感じで言いながらわたしの首輪にリード紐をつけました。

「美樹、どこまで調教できているの？」

腕組みをした成美さんがわたしの裸体を舐めるように見ています。

「牝犬の躰は一通りできているわ」

美樹さんにリード紐をぐいっと引かれ、わたしはバランスを崩しました。

「先生、さあ、いつものように牝犬になってください」

真理さんにぐいっと背中を押され、バランスを崩したわたしはカーペットを敷いた床に四つん這いになってしまいま

した。

「お手！」

前にしゃがみ込んだ美樹さんが手を出しています。鋭い瞳で見つめられています。わたしは気おされて視線をはずしました。躄けられたとおりに、すぐ「お手」をしなければいけないのですが、軀が動きません。だって成美さんと真理さんがくすくす笑いながらすぐそばで見ているのです。

3人の共有奴隷になるように言われても、気持ちの整理などできるはずありません。教え子の女の子たちの前で牝犬になった姿を晒すことは身を裂かれるほどに恥辱的なのです。

「わたしに恥をかかせないでよ。ちゃんと毎日躄けたでしよ」

美樹さんのつぶらな瞳でにらまれたわたしは、おずおずと四つん這いの右手をあげ、美樹さんの手の平の上にととうのせてしまいました。

「恥ずかしそうにお手するところがかわいいわ。先生の綺

麗な顔、赤くなっているう」

成美さんの声です。

「おかわり！」

今度はすぐに左手をあげました。